反故

大木にからまる蔓草に連なる枯葉は
冷たい微風にゆらゆらと揺れ
実験室に独り居る僕を
ゆっくりと
しかし、確かな力強さで引いてゆく
喪失の怖れへと

再び春が訪れようとして
陽光(ひかり)の粒子がうち騒ぎ
遥か彼方の眺望を点描とするとき
僕は、自らの意思で呼吸する
北風が残した温もりと
東風が運びつつある哀しい幸福とを

次第次第に強まる乾ききった風は
埃を巻き上げながら
貧困にあえぐ翼をとらえ
僕を押し込めようとする
背走と仮死、そして焦燥へと
色彩の失せた言葉の連なりへと

僕はかろうじてヴァイオリンを手にしたが
ありったけのヴィブラートをかけ
典雅な曲想を台無しにした
そして、弾き終えて後、
まるで呆けたように
そこらじゅうに散らばった破片を拾い集めていた

(2000.2.16)